

第3章 わかやまの自然と生活



熊野の山のめぐみ



関連地域の位置

熊野の雑木林利用

熊野地域には、もともとカシ類を中心とした常緑広葉樹の照葉樹林がひろがっていました。こうした森はいわゆる雑木林で、人間が一定の管理をし続けることで、利用したい植物が多く取れる状態に森の成長をとどめておくことができます。熊野では、備長炭を焼いたり、養蜂を行ったり、キノコを栽培したり、山村の生活に利用する材料を採集したりする目的で、雑木林を利用してきました。豊かな山は、きれいな川を育み、人々は川漁をして季節の魚やカニ・エビなどをとって食料としました。



熊野蜜の収穫

備長炭（白炭）は、熊野の雑木林利用の代表的なものです。その硬さと品質において、世界一の炭と言われる備長炭は熊野で生まれました。紀州藩がこれを奨励し、大きく発展しました。材料は、1965（昭和30）年までは雑木林の木は何でも焼いたのですが、やはり、温暖な地域に生えるウバメガシが最も良質で、その他のカシ類も焼かれました。焼いた炭は、ススキの茎で作った俵で出荷しました。

江戸時代の百科事典『日本山海名産図会』は、“熊野蜜が日本第一”としています。熊野では現在でも、野生のニホンミツバチを養蜂しています。セイヨウミツバチが、1種類の決まった花から蜜を集めるのに対し、ニホンミツバチは、雑木林の中にあるありとあらゆる花から蜜を集めます。比重が重く、粘りがあり、濃厚な甘さの熊野蜜は、現在でも高価なものです。野生のハチのため飼育が難しく、熊野の養蜂は、気まぐれなハチといかに付き合うかが大切だそうです。

雑木林にはたくさんの動物がいたので、古くからイノシシ・シカなどの狩猟が行われてきました。狩猟は、犬と人が連係して行うもので、犬が動物の動きを止め、それを鉄砲で撃ちます。「紀州犬」といえば白い犬を思い浮かべますが、熊野の地域ごとの在来種には、白・黒・茶・淡赤・ゴマなどがあり、狩猟犬として使われてきました。ニホンオオカミの血をひくとされる熊野の狩猟犬は、とても優秀であったといえます。

雑木林の落葉広葉樹の実、貴重な食料でした。カヤ・シイ・クリ・トチノキのほか、ブナ類・カシ類・ナラ類のドングリなどの実は、アク抜きをして食しました。また、雑木林ではキノコもたくさんとれ、干しシイタケは現金収入ともなりました。

熊野の林業

熊野の林業は、江戸時代後期から部分的に始まっていましたが、紀州藩が備長炭などの雑木林利用を積極的に進めたことによって、広い天然林が残っていました。明治時代になると、クロキ（黒木）と呼ぶモミ・ツガ、チリキ（散木）と呼ぶ天然のスギやヒノキをはじめとする、天然木が伐採されていき、1897

* 1 第2編 第3章「木材と熊野炭」144ページ参照。



備長炭窯出し

(明治30)年ごろからは本格的な植林が始まりました。岩場や崖地が多い熊野では、木を詰め込みすぎないように1町の広さに4,000本程度を粗植し、間伐しながら60年後に1,500本程度とするのが一般的でした。戦後、吉野式林業(1町に8,000~1万本と密植する)が本格的に導入されるまでは、山の7合目より上には植林しないなど、おおらかな林業が行われていたのが特徴で、昭和初期にはこれを「熊野式林業」と呼ぶこともありました。

熊野は、黒潮の影響で高温多湿、降水量も多いため、木が成長するのが極端に早く、年数のたった木には虫がつきやすい環境です。そのため、昭和初期までの林業では、60~80年で伐採期を迎え、サイクルが早いのも特徴でした(吉野林業では150~300年)。切って皮をむいた材木は、まずシュラ(丸太で作った滑り台)で山中から滑り下ろし、キウマ(そり)で川まで運び、そこから上流は管流し、中流~下流は筏流し(材木を筏に組んで流す)で運び、河口の市場や製材所に運びました。水量が少ない時期は、丸太で鉄砲堰(小さなダム)を作り、ためた水を一気に放流して材木を流すという、豪快な作業もあちこちで行われました。

山の神の信仰

山の神は、山仕事をする人がまつる神です。多くの恵みを与えてくれる自然に対して、畏敬の念を持っていたことのあらわれといえます。

山の神は多くの場合、集落と山との境目にまつられます。普段も山の木を切り始めるときに、酒などを供えて感謝する儀式を行うほか、11月7日には、山仕事の仲間が集って、山祭り(山の神の祭り)を行います。この日は、山の神が1年に1度山の木を数えて確認する日とされ、山仕事をする木の本に数えられて人間が木になってしまうと恐れられてきました。かつてはこの日に、みなで食事をして楽しんだり、相撲をとったりして、1日を過ごしたそうです。

現在でも山村では、山祭りが各地で行われており、山への感謝の気持ちを新たにするとされています。

熊野の山村の農業

熊野の山村でも米作りをしてきましたが、その水田は、主に棚田と天水田として作られてきました。棚田は、傾斜地を開拓し石積みをした水田で、水は上の田から順番に下へ流していきます。現在でも田辺市中辺路町高原をはじめ、いくつかの集落到規模の大きな棚田が残っています。一方、天水田とは、水路が無く雨水をためるだけの水田のことで、1年中水がた



畑の周囲に植えられた茶の木

まっているので、フケ(深田)とも呼ばれます。耕地にできる土地が限られた山深い村ならではのものですが、管理や作業の大変さから現在ではほとんどみられません。

一方熊野の畑作は、家のまわりの小規模な畑で、イモや雑穀などの自家消費用の作物栽培が古くから行われてきました。畑には、雑木林の木の新芽を肥料として使いました。茶粥を炊くための茶を畑のふちに植えている例もよく見られ、現在でも多くの農家が自家製の番茶を作っています。



山村の棚田

*1 1町は、1ha。

*2 第1編 第3章「日高川の山村」52ページ参照。